ヒアリング調査結果
～子ども食堂運営者～

〇実施日時：平成31年2月15日（金）　午前10時～11時30分
〇実施場所：イングビル３階　第４会議室
〇実施方法：市内の子ども食堂の意見交換会が開催された際、会議内でグループヒアリング形式により実施。
〇回 答 者：子ども食堂　みらい／木・々　子ども食堂／わいわいクッキング／放課後キッチン・ごろごろ（順不同）

活動を始めた経緯、きっかけ

- （子ども食堂　みらい）「NPO 法人サポートハウス年輪」設立 20 周年を機に職員の発案で「カフェきずな」を開始。配食サービスを行っており厨房があった。厨房スタッフがかねてより子ども食堂に関心があり、先進事例を知って、ボランティアで参加。カフェ、厨房を持つ自分たちにもできないだろうかと考え、子どもが一人でも入れる場を目指し、子ども食堂をはじめた。今年で５年目を迎える。来所する子どもは、宿題、遊び、おとなと一緒に食事を準備し、食べてから、後片付けをして帰る。実施場所には、認知症対応デイサービスのフロアがあり、子どもが来る時間帯にはお年寄りもいるので、一緒にゲームやピアノを弾くなどの交流をしている。毎回、およそ 10～15 人の利用がある。
  【開催日時：第２・３水曜日　午後４時～６時 30 分】
- （木・々　子ども食堂）もともと「コミュニティーレストラン木・々」を開設しており、４年ほど前に子どもの貧困問題の報道などを受け、レストランの運営会議で自分たちにできることはないかと考えて子ども食堂を開始。それほど広いスペースではないが、最近は幼児を連れた父親、家族などが来て、おしゃべりをして帰るといったことも多い。1 回で 20～40 食分を用意し、毎回完食となる。
  【開催日時：第４日曜日　午前 11 時～午後１時】
- （わいわいクッキング）団体名「西東京わいわいネット」が行う子ども食堂。田無公民館で開催した社会問題講座「子どもの貧困に向きあう地域をつくる」の受講者が、「自分たちで何かできないか」という考えから、平成 27 年に「西東京わいわいネット」を立ち上げた。活動拠点だった公民館で食に関することをできないだろうか、ということで、わいわいクッキングを開始。公民館には立派な調理室があるので、食堂というよりは一緒に作る活動ができる。テーマは、一緒にごはんを「作って食べる」。大人を含めて毎回 25 組（50 名）程度が参加している。
  【開催日時：第３土曜日　午前 11 時～午後２時】
- （放課後キッチン・ごろごろ）「西東京わいわいネット」から派生。社会福祉協議会の地域活動拠点ができたことをきっかけに、子ども食堂をはじめた（平成 28 年３月）。立ち上げたときに、「西東京わいわいネット」の子育てが一段落した方（十数人）が、メンバーとして参加してくれた。子どもの貧困という問題が西東京市にもあるのかもしれないという思いから、「ご飯をつくることなら私たちにもできるよね」「ずっと家族に作ってきたしね」という気持ちではじめて、今に至っている。来所する子どもには、食事を作るところを見て「手作り」自体に感動する子もいる。15 人まで入れる場所だが、毎回いっぱいになる。
  【開催日時：第２月曜日、第４木曜日（祝日休み）　午後４時～７時】

まとめ----------

〇活動拠点、地域活動が既にあり、子どもの貧困問題の話題の高まりなどをきっかけに「自分

たちにもできることはないか」との思いから「子ども食堂」を始めた例が多い。

○「食事をとる場所」にとどまらず、子ども食堂から派生して、学習支援など子どもに提供するもの・場・人の広がりがみられる。

子育てで困っている（ように思われる）保護者、何らかの支援が必要だと感じられる子どもと接した経験。その子どもや家庭の状況。活動内での対応など

子どもの状況	接したことが「ある」と回答した団体数
食事を十分にとれていないようだ	3
学校等に友人がいないようだ	1
服装や髪が不衛生なことが続いている	1
不登校を経験している	3
家庭が地域から孤立しているようだ	2
学校の授業が理解できていないようだ	1
保護者が家庭を顧みていないようだ	2
非行や非行につながる問題行動がある	1

- 食事を十分にとっていないと思われる子どもは多い。他の子どももいるため、様子を見ながらさりげなくご飯のおかわりをさせてあげる。
- 提供した食事を持ち帰りたいという子ども。持ち帰りをさせてはいけないので、その場で（可能な範囲で）いっぱい食べてね、と食べさせてあげる。
- 外国人の子どもで、親（母親）も一緒に来てたくさん食べる例。親の仕事の関係か来場が遅め（午後６時過ぎ）のため、食事確保の意味もあって来る時は事前に電話をもらうようにしている。
- 持ち物や着ているもので貧困状態を感じさせる例はある。

まとめ----------

○すべての団体で、「貧困状態にある」と感じさせる子どもに接している。

○利用している子ども全体とのバランスもあり、目立った形の特別扱いはしにくい。その子どもや保護者への配慮（スティグマへの配慮）という意味でも「さりげなく」「そっと」という気遣いをしている。

他の機関・団体との連携など

- 子ども家庭支援センターから紹介されて訪れる（親が来させる）ケースもある。
- 支援が必要と考えられた事例について、要保護児童対策地域協議会のケース会議で取り上げてもらった。
- 学校や、社会福祉協議会、児童館・児童センターとの連携も多い。
- 学校、児童館・児童センターには子ども食堂のチラシを置いてもらうなど、告知面での協力をもらっている。

- 学校との関わりでは、校長や教員、教育長まで来場するなど、積極的に関わりをもってくれようとしている例もある。
- 学校とはあまり関わりがない団体もある。

まとめ----------

〇市の機関、学校等との距離感は団体により異なる。

人・モノ・お金などで、地域等からの協力を得ていること。不足していること

- 活動の案内については、学校、児童館・児童センターの協力を得られている（前述）。
- 近隣の大学のゼミ生が活動に参加してくれる。
- フードドライブからの食材の支援を受けている。
- 近隣のお肉屋さんが月１回食材を提供してくれている。
- 近隣の人などから寄付（家庭菜園でできた野菜など）をいただくことは少なくない。
- 寄付（利用は無料だがお金を持ってきて払うと言う）をくれた子どもがいた。気持ちの問題なので１回だけ受け取った。
- 子どもとのコミュニケーションをとれる人で、男の人がスタッフにいてくれると嬉しい。
- 学習支援をしてくれる（学生など）人がいてくれると嬉しい。

まとめ----------

〇「場所」（活動拠点）については充足している。

〇「人」について、ボランタリーに参加してくれる男性を求める声があった。女性スタッフだけでは抑えがきかない子どもなどに、きっぱりと対応でき、かつ、子どもへの理解もある男性がいてくれると心強いと考えているが、なかなかそのような人材は確保しにくいとの声もあった。

〇食の提供（調理など）以外にも学習支援や居場所としての運営面で参加してくれるスタッフが求められている。

〇どこの団体も今はフルに子どもたちを受け入れている状況。年齢が上がれば子どもたちは来なくなるので、常に活動の周知は必要と考えている。

課題と感じること。市や地域の人たちに「こうあってほしい」と思うこと

- 利用者は口コミで広がっていると思われる。チラシ等も活動紹介には有効と感じる。しかし、本当に支援が必要な子どもや家庭に活動の情報が届いているのだろうかと考えることがある。着実に届ける手段がなかなかない。
- ネットで活動を見て遠隔地から訪れる子どももいる。それは良いが、もっと近隣にも対象となる子どもがいるのではないかと感じることがある。どのように案内ができるのか手段を考えているところ。
- SSW（スクールソーシャルワーカー）もなかなか増えない。民生委員・児童委員もやれることには限りがあると思われる。市内の活動（社会資源）について行政が把握し、各所にある活動の情報がしっかりと共有されるとよいのではないか。
- 「子ども食堂」のような活動が小学校区に１つずつくらいあれば理想的とは思う。新し

く活動を始めたいという市民は多くいるように感じる。行政がその立ち上げの支援をしてくれるとよい。

- 活動を「知ってもらうこと」がまず大事だと思う。市は広報に力を注いでもらいたい。
- 各地域、各団体の活動をカレンダーのように見やすく整理して掲示・公開するなどできるとよい。活動を知ってもらうことで、参加者だけでなく理解や寄付などの広がりも期待できるのではないか。
- ひとり親の家庭などにうまく情報が届くような工夫が必要と思う。
- 豊島区の事例「フードパントリー」※のようなことはできないだろうか。

まとめ----------

〇課題と感じること、市や地域の人たちに「こうあってほしい」と思うことでは、「貧困問題」「支援が必要な子どもや家庭」についての意見が多く挙げられた。

〇支援が必要な子どもや家庭への情報提供の方法に課題があると感じている。

〇市民の中には互助的な発想や「協力したい」と考える人が少なくないはず、という意見は多い。その掘り起こしや子ども食堂の立ち上げの際に市から助言があるとよいとの声があった。

〇対象の把握や情報共有については、個人情報保護の観点からの難しさも指摘されていた。

※参考

【東京都のフードパントリー設置事業】

〇住民の身近な地域にフードパントリー（食の中継地点）を設置し、生活困窮者に対する食料提供と同時に、生活の状況や困りごとについて話を聞くことで、食の問題の背後にある真の課題を把握し、現在区市等の相談支援窓口を利用していない生活困窮者を、それぞれの状況・以降に応じた適切な相談支援に繋ぐことを目的とする。

〈期待される効果〉

・支援が必要な子どもとその世帯の早期発見・自立支援へのつなぎ

・食の支援を通した地域での支援ネットワークづくり